

冬ふゆの日にひ靱負ゆけひの御井みゐに幸いでましし時に、内命ないみやう  
婦石川朝臣むいしかはのあそみ、詔みことにり応へて雪ゆきを賦あづする歌一首

四四三九番

松まつが枝えの地つちに着つくまで 降ふる雪ゆきを 見みずてや妹いも  
が 隠こもり居をるらむ

上総かみつまきのくに国の朝集使てうしかしだいじ大掾おほはらのまひと真人いまき今城みやこ、京みやこに向

かふ時に、郡司ぐんしが妻女等めづらが餓せんする歌二首

四四四〇番

足柄あしがらの八重山やへやま越えて いましなば 誰たれをか君きみと  
見みつつしの憊はむ

四四四一番

立たちしなふ 君きみが姿すがたを 忘わすれずは 世よの限かぎりにや  
恋こひ渡わたりなむ